

人文会ニュース

2004. 6

巻頭エッセー 書いて出版することの希望.....	中山千夏	1
書店からひとこと フタバ図書です, よろしく	吉田勝広	3
ジュンク堂カフェ・セミナー 「こんなおじさんだったら, 説教されたい!」 —レヴィナスから映画・武道論まで.....	内田 樹	5
わが社の一冊		33
人文会総会報告と人文会活動報告.....		36

新たな視点から書き下ろした
「狭山事件」の決定版。

狭山事件

石川一雄、
四十一年目の真実

鎌田 慧

きわめて冤罪の疑いが強いこの事件を、石川一雄や関係者にロングインタビューを敢行、根底から捉え直す。獄中31年、仮出獄から10年——、どん底から最高裁へ放たれた無実の訴え。定価2310円(税込)

草思社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8
☎03(3470)6565 <http://www.soshisha.com/>

自分で考えてみる哲学

ブレンダン・ウィルソン著／山本史郎訳

自分のことばが変わると自分の目にみえるものも変わってくる。西欧の近現代哲学の豊かな面白さに、自分で考えながら分け入ってゆくテキスト。 二五二〇円

中国の衝撃

溝口雄三

進展する経済と、わだかまる歴史問題。いま中国をどう見たらいいのか。西洋化でないアジアの近代を描いて、あらわな断層と齟齬に挑む。 二二〇〇円

東京大学出版会 [価格
税込]

東京都文京区本郷7-3-1 ☎03-3811-8814

イングラント社会史

A・ブリッグズ

今井宏・中野春夫・中野香織訳

ヨーロッパ辺境の小国を世界帝国へと発展させた歴史の原動力を、政治、経済、宗教、戦争、衣食住の細部に尋ね、究明に描ききった、イングラント社会史研究の金字塔。写真多数収録 A5判・7140円

水俣学講義

原田正純・編著

水俣病事件にさまざまなものを映してみても何が見えるか。水俣病を真摯に全身で受け止めた人びとの貴重な証言。

となりのコリアン

—日本社会と在日コリアン

在日コリアン研究会編

「拉致」の嵐は「在日コリアン」を巻き込み、猛威を振るっている。いま「在日コリアン」との共生の道を模索する。姜尚中氏推薦。

◆1785円(税込)

◆2835円(税込)

日本評論社 <http://www.nippyo.co.jp/>
東京都豊島区南大塚3-12-4 ☎03-3987-8621

サービスセンター 筑摩書房 048-651-0053
*税込 <http://www.chikumashobo.co.jp/>

書いて出版することの希望

中山千夏

最近、私はいくつかのスローガンを掲げている。世の中があんまり激しく奈落に向って傾くので、流されてしまわないよう、自分を励ますスローガンだ。「正義があっても殺さない」「国家より個人」そして「儲かることは悪いこと」。もちろん人間、儲け無しには暮らせないし、私だってお金の使い道には不自由していないが、諸悪の根源、経済効率崇拜主義に抵抗するためには、あえて「悪いこと」と断定するくらいでなければだめなのだ。

てなことをめんめんと書いた本を昨年、出した。何部売れたか知らない。というのも、出版部数や販売部数をチェックする習慣がまるで無いからだ。商売のセンスが無いことにかけては自信がある。何部出せばいいかなんてさっぱりわからないから、関知しないことにしている。売れ行きにしても同じことだ。チェックして売れ行きが悪ければ悲しいだけだし、逆に売れ行きがよければわざわざ聞くまでもなく、いつかは著者の耳にも入る。

なんの噂も聞かないから、たぶん売れていない。だいたい題材が売れ筋を外れている。おまけに、著者が、儲け主義メディアの最たるものであるテレビを嫌って出演せず、従って知名度が低く、おまけに出版社は弱小、一行の新聞広告すら出ない、いきおい書店も仕入れを渋る、それどころか狂ったように日々出る本の洪水にまぎれて、存在すら知られない、そういう始末なのだから。

こんな時、「儲かることは悪いこと」のスローガンが私を奮い立たせてくれる。そうだ、だからこれでいいのだ。考えてもみよ。ものを書くのは儲けるためか？ 違う!! 書きたいから書く。出版するのは儲けるためか？ 違う!! 伝えたいから出版する。

自分の心と、どこかの誰かの心とが響き合うかもしれない、その希望がものを書き出版することの一番の意義だ。そのついでに儲かったらこんなに嬉しいことはない、そういう順番のものなのだ。自分の心と、どこかの誰かの心とが響きあうかもしれないという希望、それは実は、どんな仕事にも第一にあつていい意義だと思う。いや、この希望が無く、ただ儲けるほかに意義のない仕事は、たとえそれが芸術であっても、味気ない過労死のもてしかないだろう。

そんな私の感覚は、プロよりも、自費出版する人々と相通じている。そう思うようになったのは、「日本自費出版文化賞」の選考委員を始めてからだ。歴史家の色川大吉さんやルポライターの鎌田慧さんたちといっしょに年一回、昨年7回目を迎えた。主管は、自費出版にたずさわっている出版社や印刷屋さんが集まった、自費出版ネットワークという団体。初めのうちは、色川さんに誘われてお義理の感じていたのだが、主催の人々の熱心さや、なによりも応募書籍の質量共にすごいエネルギーを毎年浴びているうちに、あれ、もしかすると、自費出版にこそ、出版本来の意義が生きているぞ、と思い始めたのだった。

著者たちは、まず、書きたいから書き、伝えたいから出版している。業者もそれを応援している。ついでに儲けよう、という魂胆があつても、それは二の次なのだ。

しかし、おおむね著者が無名で広告ベースに載らないから、たぶん私の本よりも世に知られないでいる。出版本来の意義を持つ本たちなのに、そして、内容的に商業出版を上回るものも少なくないのに、残念だ。広告には頼りたくない。となると頼みは書店だ。書店に「自費出版」とか「小部数出版本」とかの棚ができるようになったら、ずいぶん、世の中の経済効率崇拝主義にブレーキがかかる、書店経営も楽しくなる、と思うのだが、どうだろう。そうそう、レアもの流行りだから、案外ついでに儲かるかもしれないし!!

(俳優・元参議院議員)

フタバ図書です、よろしく

吉田勝広

フタバ図書は、昭和五十年まで広島ではトップシェアの書店でしたが、町の中心である紙屋町バスセンターの6階に紀伊国屋書店が出店しました。それまで広島でいちばん大きな店が200坪だったのですが、その二倍以上の450坪の超一番店が出店してきたのです。それ以来、広島市内の書店はずっと紀伊国屋書店のひとり勝ちといった状況でした。その後、フタバ図書は郊外型の書店を次々とオープンさせ、当時はまだあまり盛んではありましたが、ビデオ・CDレンタル事業を立ち上げたのをはじめ、CD、ゲームソフト、文具の販売など新しい書店の形を考え、つぎつぎ事業を立ち上げていきました。

それから十数年の時を経て、広島市内から車で約十五分の郊外に「フタバ図書MEGA」を立ち上げることになりました。立ち上げ準備が始まるその時に、縁あって私はこのフタバ図書に入社することになったのですが、人手不足のためか、単なる偶然に偶然が重なったか、書店・出版業界の右も左もわからない新入社員の私が、このフタバ図書の一大行事となる大型店の出店に携わることになってしまいました。

もちろん入社一ヶ月の私では、準備といっても何をすればいいのか全くわかりませんでしたので、当時の上司と共に、関東・関西方面の大型書店さんに訪問しては話を聞かせて頂き、棚の商品の並びを見学する毎日でした（当時お世話になった各書店様ありがとうございました）。毎日が新しいことの連続で、自分のやっていることが正しいのかどうかもわからない状態でしたが、逆にそれが大きなプレッシャーを感じずに済んだ要因なのかもしれません。無知っていうのは怖いですが、当時の私にとっては無知こそが原動力となつて、MEGAという大型店の準備に邁進できたのかなと今では思っています。

現在は商品戦略室ということで当時とは立場も状況も違いますが、新規出店に携わっています。知恵も経験も多少はついている現在のほうが、新入社員だった当時よりもプレッシャーも、恐れもあるような気がします（それでも上司や同僚にはプレッシャーが全くかかってない呑気な表情に見えるようですが…笑）。さて、その新規出店ですが、今年の3月に「フタバ図書TEERA広島府中店」という大型店を出店いたしました。「楽しさ（祝祭）と安らぎ（癒し）」の空間を、60テラと言われる人間の体細胞の一つ一つで感じて欲しい」というコンセプトのもと、本はもちろん、文具、CD、DVD、ゲームソフトの各売り場で様々な機器の導入や新しい情報提案の形を表現しています。正直、まだまだ満足のいけるレベルではなく、もっと勉強していかなくてはなりませんが、MEGAがオープンして以来七年、わからないなりに専門書を学んできた結果が、ちよつとだけ実を結んで来たような気がします（出版社様の「まだまだ」といった声が聞こえてきそうですね）。

特に今回、無知な私たちのために、人文会様を始め非常に多くの出版社様にご協力いただき、なんとか無事にオープンできましたことを、店長、従業員共々、非常に感謝しております。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。で、現在の私とは申しますと、6月上旬にオープンしますTEERA福岡東店のオープン準備のために、福岡県に入り浸りの毎日です（じつは新規出店担当！）。じつは、この文章を書いている隣で、スタッフが棚詰めをおこなっております（笑）。私が寄稿しました稚拙な文章が、こちらの誌面に載る頃には、ちよつと一息つけるのではないかと思います。

この福岡東店がオープンしますと、私どもフタバ図書も大型店が三店となります。社内での専門書担当の切磋琢磨もさることながら、各出版社様のご協力を仰ぎつつ、少しずつでも「お客様と良書との出会い」を演出、手助けできればと思います。いつもいつもお願いばかりで非常に恐縮ですが、今後も御指導、ご尽力ただけますようお願い申し上げます。また各出版社様、さらには出版業界の発展に少しでも寄与できるよう全従業員一丸となり、精進して参ります。

（フタバ図書商品戦略室）

「こんなおじさんだったら、説教されたい!」

—レヴィナスから映画・武道論まで

神戸女学院大学文学部教授

内 田 樹

ユーザー・フレンドリーな内田です

きょうは皆さん、ご多用中のなかジUNK堂までお運びいただきましてありがとうございます。このところちよつと講演が続いておりまして、ネタがそろそろ切れてきていて、前聞いた人は来ないでほしいな—と思つていたら、ずいぶんたくさんの方、またリピーターの方も来ていただきまして、ちよつと悔しいのでご紹介させていただきます。

ほかのホームページをごらんの方はよくご存じだと思つていただいても、ご紹介いたしますと、あちらに立つ

ていらつしやる方は『インターネット持仏堂』の共著者でございます釈徹宗先生です。前のほうにお二人座つておりますけれども、こちらが『“Danzirious” editor of the town』のミーツリージョナルの江（弘毅）編集長です。同じく『それが問題では内科医』を寄稿しているドクター佐藤です。そういう方たちがあちらこちらにたくさん来ていらつしやいます。

ついこの間も朝日カルチャーセンターでしゃべつて、そのあとネタがないなと思ひながら芦屋の市民センターでしゃべつて、そのあと大阪の法律事務所が主催してい

る経営者セミナーでしゃべったんですが、そこら辺はうまく具合にずっと観客がずれておりました。

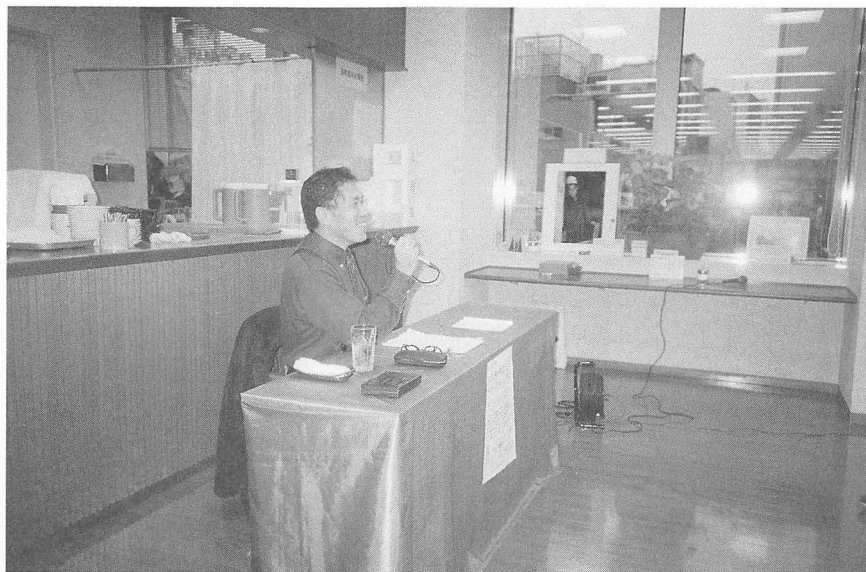
ぼくは一応ユーザー・フレンドリーを心がけておりますので、オーディエンスの方がどんなお話を聞きたがっているのかなというのを一応考え考え毎回しゃべっております。この間の経営者セミナーというのはわりとおもしろいところで、五〇代〜六〇代くらいの中小企業の経営者の方たちがほとんどだったんですけれども、「日本の大学教育は崩壊している」という話をしたら非常によくうけておりました。その前の芦屋市民センターというのはシルバークレジットだったものですから、六五歳以上の方たちばかりで、特におばあさま方が多かったんですけれども、おばあさま方は上野千鶴子の悪口を言ったら非常に喜んでおられました。聴衆によっていろいろです。きょうの聴衆の方たちは本屋にいらつしやる方ですから、だいたいよくと同類の方たちだと思っんです。

今までやったなかで一番危なかった聴衆は、リプロでことしの六月にやった甲野（善紀）先生とのジョイント対談のときの方々でした。甲野先生は危ない方と呼ばせざるタイプの方で、会場に入りましたら視線が痛いんですよ。たいていは武道オタク系の方たちで、ちよつと怖いタイプの人たちです。武道の世界には、非常に狭隘

な視野を持っていて「私は日本で一番強い！」みたいに思っている人がときどきいらつしやるんです。そういう方たちが腕組みして甲野先生をねめつけるようにして、「甲野善紀は何ぼのもんじや」みたいな感じにいる。そういう方たちが散見されました。そのとき名越康文さんという精神科の先生がおられたんですけれども、講演のあとで名越先生は「きょうの聴衆の中には境界性人格障害の人がかなり多くいらつしやいました」ということを言っておられました。でも、きょうはそういう方はいらつしやらないようなので大変安堵いたしております。

最近、人文科学系の本がだんだん売れなくなっている。その売れない人文系の本を出している良心的出版社が東大出版会を筆頭にして何十社あります。青木書店、大月書店（左翼系の出版社ですね）、紀伊國屋書店、勁草書房、春秋社、晶文社、誠信書房、そのほか筑摩書房とか、白水社、平凡社、法政大学出版局、みすず書房、ミネルヴァ書房、未來社、そういう大変コアな出版社の方たちが「人文会」という組織をつくって、「人文科学の火を絶やすな」と、こういうことをやってらつしやる。ぼくもそれに客寄せで呼びいただきました。

ぼくの書いた本が人文科学系の図書であるかどうかということに関しては、書いた本人もあまり自信がないん



講演する内田先生

です。『レヴィナスと愛の現象学』という本は、たぶん人文科学系の本だと思えますけれど、あとの本は人文系の本ではあっても、まず科学的な本とは言えないのではと思います。

じゃ、多くの書いた本は一体どんな本なんだろう、何に分類したらいいんだろうということをちょっと考えてみました。というのは、いま頃はインターネットで、これは公開してないんですけども、甲野善紀先生とのバーチャル対談というのをやっておりまして、あたかも対談をしているかのように二人がメールをやり取りしております。同じようなことを釈先生ともやっております。

甲野先生との対談の方はいろいろなトピックを同時多発的に並行させてお話をしているんですけども、ぼくが甲野先生にいろいろとお尋ねして、先生からいろいろお教えいただいて、こちらは「おおお、そうなのですか」とか「はあはあ、これはびっくり」とか、そういうふうに相づちを打っていればよいだろうと思っていたら、意外に甲野先生は突っ込みが厳しくて、「あなたの書いていることにはことここにこういう矛盾がある」と言われてびっくりしました。驚きましたね。多くの書いていることに対して、「矛盾がある」なんていうことを言う人って今までいなかったから。あたりまえだから誰も

言わなかったんでしようけれど。甲野先生に「あなたはこういうことを書いてるけれども、ここそこはちょっと違うんじゃないですか」というふうに虚をつかれたんです。ぼくは『おじさん』的思考』という本のあとがきに、「世のおじさんたちよ、元氣を出しなさい」というようなことを書きました。要するに、奥さんは威張り散らす人よりやさしい人がいいし、子どもは病的で神経症的で反抗的であるよりは、家族思いでにこにこしているほうがいい。家庭を明るくして、みんな一生懸命働いて平和な社会をつくりましょうというようなメッセージを送りたい、と書いたんです。

そのあと、ことしの春に朝日カルチャーセンターで、信田さよ子さんというカウンセラーの方と対談しました。信田さんは家庭内で起こっているいろんなドメスティック・バイオレンスとか、引きこもりとか、不登校とか、そういう問題を扱っていらっしゃる方なんですけれども、その方が「家庭っていうのはやっぱり諸悪の根源ですよ。家庭が一番いけないね。核家族が一番いけないですよ」という話をしたんですね。ぼくはすぐ調子に乗るもので、そういうことを横で言われると、「そうです、そうです。もう家族ほどこいけないものはないですよ。大体家族の中で愛情があるとかいうのは悪しき幻想です

よ」とか、そういうことをばんばん言ったら、ちょうどそのとき甲野先生が後ろのほうに座っていてにやにや笑って聞いてらしたんですね。「本に書いていることとあのとき言ったことは違うじゃないですか。内田先生は一体家庭というものをどう考えていらっしゃるのかお聞きしたい」と、すばと切り込まれてしまつて実に慌てました。

ぼくはそのときそのときに言うことがよく変わるんですけれども、とりあえず自分の傍らにいる人に対してついついフレンドリーになつてしまふ、という姿勢は一貫してゐるんです。

たとえば友だちが彼女に振られたといつて居酒屋で泣いたりしてるときに、横にいたときはやっぱり「わかるよー。女なんてろくなものじゃないよ」というようなことを言うわけですよ。心に思つてなくても、「愛なんかなくたって生きていけるよ」みたいなことを多分言うんでしょう。そのときはそういうことを言うんですけれども、多分本気じゃないんですね。こつちが本気じゃないということは、聞いている彼のほうもわかつてるわけですよ。わかっているんだけれども、意味性のレベルのメッセージじゃなくて、要するに慰めている。あるいは何とか共感しようとしている。あるいは手を触れよう

としている。そういうところのメタメッセージが伝わる。そのためにはとりあえず、語義のレベルでは何言っても構わない、というのがばくの場合あるんですね。

信田さん対談をやったときのオーディエンスの方は女性の方たちが六割か七割で、三〇代から四〇代くらいの女性が多かったんですけど、そういう方たちを前にするとやっぱり、「私は女性の味方です」というふうなことを言いたくなるわけですよ。私は皆さんの味方なんです」と平然と言ってしまう。そうすると、どうしても前回とは大分話が違うじゃないかということになってしまいうわけですね。

だけど、語義のレベルでは違うことをいつているんですけども、基本的なメタメッセージというのは一緒なんです。とにかく、自分の前にいる人に言葉を届けたいという思いがとても強いんです。だからメッセージのレベルで取ると矛盾していることがあるけれども、読者とか聴衆というのはそこじゃなくて、やっぱり「あなたに言葉を届けたい」とばくの発信しているメタメッセージのほうを聴き取っていると思いますよ、ということとを申し上げたわけです。

並行して、平川克美君という旧友ともいろいろとお手紙をやり取りをして、ホームページ上で公開して「東京

ファイティングキッズ」というお茶目なネーミングのバーチャル書簡をやっています。その平川君が「字面の文章の意味はわかるんだけど耳に入ってこないものと、逆に字面の意味がわからないけど耳に入ってくるものとかあるよね」ということを言っていました。「そうそう、そういうもんだよ」というばくも同意したのですが、「理解のレベル」というのは「意味のレベル」ではなくて、もう一つ深いレベルだと思っんですね。そういうふう考えるに至ったのはいろいろときっかけがあります。

呼吸が合ってくるということ

毎度同じことを申し上げるようで恐縮なんですけれども、最初のきっかけになったのは木田元さんという哲学者の方が書いたことなんです。木田元さんは東北大学の哲学科に行って、はじめてハイデッガーの『存在と時間』を読んだときに、何を書いてあるかまったくわからなかった。まったくわからないけれども、毎日三時間から四時間読む。そうやってずっと何日も何日もハイデッガーを読んでくると、ある段階でハイデッガーの呼吸と

自分の呼吸が合ってくる。脈拍が合ってくる。心拍数が合ってくる。息づかいみたいなものがなじんでくる。そうすると何が起るかというと、意味がわかるのではなくて、「次にハイデッガーが何を言うかがわかる」というんですね。

ぼくは翻訳をしている人間として、この感じは非常によくわかる。同じことをエマニュエル・レヴィナスの翻訳で何度も経験したことがあります。

レヴィナス先生もお書きになることが大変にむづかしい方でありまして、読んですらわからないという方はあまりおられないと思います。ぼくがレヴィナスの本をはじめて読んだのは八〇年くらいですけれども、あの段階でレヴィナスを読んで、すらすらわかるといふ人は日本にはいかなかったはずで、レヴィナスを理解できるような知的なインフラ自体が日本に存在しないんですから、無理ですよ。哲学が分かって、フランス語ができるだけじゃなくて、ユダヤ教のことを知っていないといけない。近代のヨーロッパにおけるユダヤ人の心性の歴史に通じていないとわからない。そんなリソースを同時に備えた読書人を育てるような教養的な基盤というのが、当時もそれ以前も日本社会には存在していなかったわけですから、レヴィナスはわかるはずがないんですよ。だから、

レヴィナスがわからないことは恥ずかしくとも何ともないとはぼくは思います。むしろ、これほど徹底的に「わからない」哲学的言説が存在しうる、ということに衝撃を受ける、ということの方が経験としては生産的だと思います。

当然ぼくにもまったくわからない。ぼくの場合は哲学史の知識もフランス語の知識もかなりあやふやだったもので、さらに危ない。読んでももうまったく意味がわからない。

まったく意味がわからないので何をしようとしたかといえますと、「それじゃ翻訳しよう」と思ったんですね。どうしてそう思ったかというと、最初に『困難な自由』という四〇〇ページくらいの本を読み出したんですけれども、まずそれをずっと読んでいった。最後まで読んだけれども、結局何がいいいいのか、ほとんどわからないけれど、何となくわかったような気がするところも何箇所あった。でも、どうして「何となくわかったような気がする」のかはわからない。この部分は瀬戸内海の島だというくらいの感じでわかるところがぼつぼつあって、あとは全部巨大な未知の海が広がっている。これを何とかするためにはもう翻訳するしかないだろうと思って、一行目からごりごり訳し出したわけですよ。レヴィ

ナス先生の文章というのはものすごく息の長い文章で、うっかりするとまるまる一ページ句点がなくて、ぐいぐいずつと関係代名詞でつないでつないでつないでくる、というようなとんでもない文章を書かれる。かつてコリン・デヴィスというレヴィナス研究者が「邪悪なまでに難解な文章」と書いたくらい、ものすごくわかりにくい文章なんです。とにかくそれを翻訳したわけです。とにかく訳し始めたわけですね。何もわからないんですけれども、とにかく毎日どんどん訳していく。

最初に一度全部訳してみても、読み返してみたらまるで日本語になっていない。その高さ30センチくらいの訳稿をそのまま押入に突っ込んで、一年半くらい寝かせておきました。そのあいだに、子どもが生まれたり、大学の助手になったり、世間の雑事にかまけていました。それからまたふたたび訳稿を取り出して、また全部書き直していききました。

ところが、思いがけないことに、今度は一日五、六時間ずつ二週間くらい訳したところで、「次にレヴィナスが何をいうかというのがわかる」という経験がきたんですよね。次は多分、否定疑問文でいま書いたことを否定するような文が来るんだろうなと思っていると、ぴたりと来ることがあるんですね。そうすると意味はわからな

いなりに、レヴィナスと呼吸が合ってしまうんですよ。呼吸が合うと、あとはすらすらつと。レヴィナスの身体のリズムみたいなものに同調しているわけです。思考の波長に同調する。そうすると、思考の流れ方みたいなものが感じ取れるんですね。全体の文脈はわからないんだけど、思考の流れの「フレーズ」、一楽節だけ瞬間的に同調して、何十秒かレヴィナスとよく一緒に流れていく。段落が変わると、またリズムが合わなくなつて、しばらくうろろしているうちにまたどこかばつと合流する。そういうことを繰り返していくうちに、だんだんだんだんと同調のインターバルが短くなつていて、全体の何割かがわかるようになってきたということを経験しました。

二度目の翻訳の前に一年半ほど「寝かせていた」のが、案外よかったのかなと思います。漬け物みたいなもので、その期間にレヴィナスの思考のかみ砕きにくいもの、喉にささった小骨みたいなものに、こちらの身体がなじんでいって、「かみ砕きにくいもの」はかみ砕きにくいものなりに、こちらが受け容れてしまつて、「まあ、それは、それということ」というふうに着いたということがあるんじゃないかと思うんです。そういう「熟成の時間」って、ある種の経験を受け容れて、身体になじ

ませるためには必要なんじゃないでしょうか。

身体的なものと知的なもの

それ以来、本を読む経験というのはどちらかというと脳の仕事ではなくて身体の仕事ではないか、という気がずつとしてるんですね。それは木田元さんのおっしゃった、とにかく読むときはこりこり読むということですね。書くときについても同じようなことがあると思うんですよ。村上春樹さんもレイモンド・チャンドラーも言っていることはみんな一緒なんですけれども、とにかく書くということを習慣づけなきゃいけない。一日何時間か机に向かつて、その時間の間はとにかく書く。書けなければ何もしないでタイプライターなり原稿用紙の前でただじっとしている。それ以外のことをしてはいけない。本を読んだり音楽を聞いたりしてはいけない。とにかくただじっとしている。そうしていると必ず何日目かに「何か」がやってきて書き始められるんですね。

脚韻を踏むというのがありますよね。韻文詩を書く人にとっては脚韻を踏むということはどんな感じかということがちよつとぼくらには想像しにくいんだけれど、あ

る英国詩人がいうには、韻を踏むというのは、「バス停でバスを待っているような感じ」だそうです。詩人は韻を踏むときに脚韻が揃う単語を探しに行くわけじゃないんですね。じつとバス停にいるわけです。バス停にいるとそのうちバスが来る。この「待っているとそのうち何かがやってくる」という感じがものを書くときに限らず、けつこう大事なことじゃないかとぼくは思います。

知的な活動というのはどうしても自分が知的な主体であるということが前提になります。その主体があれこれを探究したり、獲得したり、記憶したり、排除したり、登録したり、判断したり……というふうに、主体的で積極的な活動を皆さん想定されていると思うんですけれども、本当に深いレベルで起こっているのはたぶんそうじゃない。むしろ「待ち」の姿勢というか、アンテナを敏感にしてバスが来るのを待つ。あるいはインスピレーションが到来するのを待つ。自分の外側から何かがすき間を通して、あるいはドアを開けて入ってくるのを待つ。そういうのが人間にとつては非常に本来的な経験なんじゃないかと思います。

その「待つ」という営みを忍耐強くなしとげるためには、なんというか、ある種の身体的な儀礼のようなものが必要なんじゃないでしょうか。だから、ぼくら本を



挨拶する大江人文会代表幹事（右）

「黙読」している場合でも実は声を出さなければ「音読」しているわけですね。齋藤隆さんが主張しているように、音読というのが実はすぐたいせつな訓練だと思っんですよ。というのは、音読していかないと書き手と読み手の呼吸って絶対に合いませんから。音読していくとフレーズの長さとか、どこで息継ぎするかとか、どこらへんで疑問符を入れ込むかと、そういうのはその人の語り口の癖みたいなものなんです。ロラン・バルトの言葉を借りていえば「文体」（スタイル）ということになりますけれど、「スタイル」というのはその人の身体に根づいたものなんです。その人に固有の呼吸とか脈動とか、あるいは体液の濃度みたいなものだと思うんです。書き手の身体で起きている出来事とどこかで同調できないと、ハイデッガーにしてもレヴィナスにしても、「読めない」とはくは思います。

読者が読みつつある「私」というものを実体的に固定化しておいて、「私」であるところの私がハイデッガーをこれから読み解く。そういう構えでいる限り、同調というのとはとても起こりにくいと思うんですよ。

今日は浄土真宗の僧侶の方がいらつしやるので確認したいんですけども、読経みたいなものも、意味的にいま自分は何を読んでいるかということではなくて、声を

出してお経をあげることによってある種の身体的な「型」の中に自分を投げ込んでいつて、それによって自分の狭い枠組みを解き放ち、自分の外側にある「何か」との交流の場を立ち上げる。多分、そういうような身体的な訓練の一つじゃないかと思うんです。そういう身体的なエクササイズを本来ぼくたちは日常生活のさまざまな場面で、それと気づかずにとずっとやっているといるんです。

非常に知的なもの、腦的なものと思われている活動が、実は身体的なエクササイズを必要としている。待つこと、聞くこと、受信感度を高めること、こういったことって、どちらかというと受動的な経験ですよ。知的な感度が高まっていて、知性が活性化している状態というのは、じつは本質的に受動的な経験だということが、あまり語られていないのではないかと思うんです。

探すのではなく向こうからやって来る

きょう集まっていられっしゃる方はみなさん本屋さんが好きな方たちだと思うんですけれども、こういう本屋さんにはものすごい数の本があるわけですよ。こういう

ところで自分が読まなければならない本、あるいは自分に読まれることを向こうから求めているような本を探りあてるためには、一冊一冊後ろのタイトルを読んでいく。あるいは本の帯を読んでいくとか、書評を読んでいくといった作業をしているだけではたいへんに手間暇がかかるわけですよ。これだけのジャンルがあるわけですから、どのジャンルに自分が読まなければいけない本があるかなんていうことは事前にわかるわけがない。

本屋さんで本を探す作業というのは「斜め読み」に似ていると思うんです。ぼくらは本を斜め読みするということができるわけですけども、これはよくいわれるとおり人間にしかできない。機械というのは事前に検索すべきキーワードを登録しておけば、瞬間的に何十万ペーじの中から瞬間的にその箇所を全部検索してくれるけれども、人間が本を斜め読みする場合はそういう作業をしているわけじゃない。キーワードは事前に登録されてないわけですから。つまり、斜め読みしながら、キーワードを発見するわけです。「なぜこの単語に自分がひっかったのか」ということの理由を本人も説明できない。にもかかわらず、ある単語に引っかかってしまったという形でぼくらは事後的に、自分が斜め読みを通じて何をその本から読み出そうとしていたのかを知るわけです。

これは非常に効率のいい情報検索方法ですよ。実際、斜め読みをしているとき、その本の中で自分が読み取らなければいけないことを読み落とすということはあまり起こらない。何かこの本には自分が読まなきゃいけないことが書いてあるような気がすると思つて、ぺらぺらと本をめくつてゆくと、必ずしかるべき箇所ではたと指が止まる。ぼくらはそんなに速い速度で文を読めませんから、文脈や語の意味に反応しているわけではない。じゃあ、何に反応しているのかというと、やはり文のレベルよりももう一つ深いレベルで、その本のある箇所が発信しているものを身体的に感知しているわけですね。本のほうから「ストップ！」というのがかかつて、その瞬間に指が止まる。逆に言えば、そういう感度がある人しか斜め読みというのはできないわけです。

だから学者は案外斜め読みが苦手です。学者というのは膨大な資料を読まなきゃいけないわけですから、そのうちのほとんどはある結論を導きだすための実証的記述であつて、そのような実証的記述を積み重ねていったあげく、ある一行を言いたいために学者は書いているわけです。五〇〇ページの本のうち四九九ページは論証の箇所であつて、その中の一ページの数行に、この人が「本当に言いたいこと」がある。それは必ずしもその本

の「結論」ではないんです。というか、書いている人自身、それが自分の「本当に言いたいこと」であるということさえわかつていない。だから、「本当に言いたいこと」は本の中のどこかにあるんです。冒頭の「献辞」ところにあつたり、「あとがき」にあつたり、場合によっては脚注にこそつと隠れていたりする。

こういうのを探するのが学者はけっこうダメなんです。片手に赤えんぴつを持つて頭からごりごり全部読んでいつて、最後まで読んで次の本に行く、というようなどんくさいことをやっている人は、悪いけれど学者としては成功しません。能率が悪すぎますから。そんな律儀な検索の仕方をしていると、まず数年で身体が壊れてしまします。

院生くらいのレベルだとそういう検索の仕方をしてしまふ人がまだいる。そういう若い研究者には、「そういうんじゃないくて、本は斜め読みしなきゃいけない、自分が必要な情報があつちから君のほうに飛び込んでくるのだから、それが飛び込んできたときにすばつと捕まえるんだよ」というふうに教えるんですけれど、なかなか通じないですね。

野球で守備をしているときと同じです。外野手の守備範囲なんてめちゃくちゃ広いじゃないですか。でも、

「あっちから飛び込んでくる球」をプロのプレイヤーは難なく捕球しますよね。あれでいいんです。フィールドの端から端までを1センチ刻みに歩く必要なんかない。球の「落下地点」について、そこでグローブをひろげて待つていればいいんです。

でも、受験勉強の延長で学問をやっている人は、結局そうやって端から端まで読むような読書の仕方をする。この夏休み中に五千ページ本を読みましたと自慢する。いや、五千ページ本全部読んじゃだめなんだよ、五千ページの中からほんとうに必要な五ページを見つけだして、そこを読むということができるようなスキルを磨くのが大事なのだけれど、そのところがなかからわからない。だって、「誰にとっても重要な情報」なんてないんだから。ある哲学者の本の中で、読んだ人の世界観や人間観をがらっと変えてしまつて、それからあとの生き方を一変させるフリーズなんか、読む人ごとに全部違うわけじゃないですか。同じはずがないです。だから、「あ、これが自分が待っていた言葉だ」と直感できるおのれの身体感覚を信じるしかないんです。

たしかに、学校ではそういうことは誰も教えてくれない。でも、知性の活用というときに、一番大事なのは「自分がほんとうに必要とする言葉」にむかつてまつす

ぐ進む能力だと思ふんです。

強い本と弱い本

本屋の話に戻りますけれど、なんで本屋に来るかという、本屋に来て歩いていると向こうの方から「つんつん」とつつかれるわけです。本当につつかれてそつちを振り返るとある本のタイトルがそこでぴかっと光つて、そこに吸い寄せられるように手が伸びて、本を開くと、ちょうどそのとき自分の頭で何か浮かんでいて、うまく言葉にできなかった思いを、見事に言語化したフリーズと出会つたりするんですよ。

「そうそう、まさにこれなんだよ、おれが言いたかったことは」というふうだね。

で、それをそのままレジに持つていつて買う。そういうことってそんなにあるはずがないだろうと言うかもしれないんですけど、これがあるんですよ。

皆さんも多分経験あると思うんですけど、朝からずっとある音楽の短いフリーズが頭にこびりついて離れない、ということがあるじゃないですか。同じフリーズが繰り返し繰り返し浮かんできて、もう止めようと思つ



会場風景のひとつ

ても、ふと気づくとまた繰り返している。

ぼくは娘と二人ですつと暮らしてたんですけれども、娘が中学生くらいのとき、ある朝三十年くらい前のCMソングが突然ふつと頭に浮かんで、離れなくなってしまった。何かやるたびにそのフレーズが出てくる。もちろん、口に出してるわけじゃなくて、頭の中で歌ってるんです。そういうことがよくありますよね。なんかはやり歌みたいなものとか、あるいはクラシックの定番のフレーズであるとか、CMソングであるとか、ぜんぜん好きでもなんでもない曲の変な楽節がこびりついてなかなか離れない。スパゲッティをゆでながら、お皿を洗いながら、頭の中で何度も同じフレーズが出てくる。ところがそのときに、少し離れたところにいて本を読んでいた娘が、そのフレーズの続きを歌い出した。ぼくは鼻歌も何も歌ってないんですよ。心の中でその歌を歌っていたら、それが向こうに伝わっていく。で、思わず娘に向かって「ねえ、どうしてその歌を急に歌いだしたの?」と言ったら、「いや、なんか歌いたくなったから」と言うんですね。ふつと忘れ物を思い出すかのような体感として、そのメロディが出てきちゃう。そういうものなんです。親子で一緒に暮らしていて、そのときは数メートルくらいの距離しか離れていない。それくらいだと頭の

中で思い描いた音楽の数小節くらいの情報なら、そうとうに明確に伝わるんですよ。それに類したことを経験されている方は、多分いっぱいいると思うんです。生身の人間同士の間ではそういうことが起こる。

それと同じで、本だつてちゃんと「信号」を出してるんですよ。ただ、すごく信号の微弱な「弱い本」と、ドーンと「おれを読めー」というふうには信号を出してる「強い本」の違いというのははっきりありますね。これは本屋の中を歩いていればわかる。多くの経験からいうと、色づかいの多い本とか、タイトルがでかい本とか、写真が入ってる本というのは大体「弱い本」なんですよね。そういうのは並んでてもあんまり「来ない」。「強い」本というのは物質性がある本なんですけど、どっちかというところ紙の上にインクが乗っかってるんじゃないかって紙の中にインクがぐいっとしみ込んでるような、ページの中に凸版がしみ込んだような昔ながらの本で、全編びっしり活字だけ。写真とか挿絵とかがまったく入ってないような本の中にけっこう「強い本」ってあるんですよ。その本の「強さ」というのを構成するファクターって、何なのでしょうね。書いた人とか、エディターとか、本の装丁とか、製本をした人たち、いろんな人たちの思いがそこに詰まっているんでしょうけれども、何か強い

「念」みたいなものが込められた本というのがあって、やっぱりそれが「強い本」なんです。それは出版社の規模とか値段とか発行部数なんかにはぜんぜん関係ない。そういう本のそばを通ると、ある種の非常にフィジカルな信号がピッピッピッと来るわけです。強い信号が来ると、まるで吸い寄せられるようにその本を手にと取ってしまう。この「吸い寄せられるようにその本に手が届く」という感じがわかる人でないと、このジュンク堂みたいに巨大な本屋さんに来るとまったく時間のむだになるわけです。こういうところに来る方たちというのは、基本的には書評を見て、その書評に取り上げられていた本を買いにくるというわけではなくて、やっぱりただ書棚の間を漫然と歩いていって、歩きながら自分のアンテナが微弱な信号をキャッチしたというときのときめき感、それを求めて来てると思うんですよ。

よく本屋に来ると便意をもよおすということがあります。よくは本屋に来ると必ず、一〇〇%の確率でトイレに行きたくなるんですけれども、本屋というのはトイレが少ないんですよ。トイレに本を持ち込んでカバンにしまい込むと万引きできちゃうから、なるべくそういうことができないようにトイレの個室というのは非常に制限されてる。これくらい大きな本屋さんでも多分トイレ

はたくさんはないと思うんですけども、ぼくは本屋に入るとうっかりすると二分後くらいに便意をもよおしてしまふ。でも本屋のドアから出てしまふとはげしい便意がすつと引いていく。昔、『本の雑誌』でそういうことを書いた人がいたら、翌月号に日本じゅうから私もそうです私もそうですと投書が殺到したことがありました。周りの人に聞いても、けっこう多いです。そういう話をしたら「内田君、君はそうやって話を全部オカルトに持っていくけれども、そうじゃなくて、これは書物の発するインクのおいが人間の脳に作用して、それが便意を誘うのである」ということをまことしやかに言う人がいて、ほんとかなと思っただけですけども、同じことがT S U T A Y A に行つてビデオを探してるときも起こるの、やっぱり違うんじゃないかな。要するに、本が発する信号をキャッチできるということは、相当普段とは違う身体感受性の感度を上げていかなきゃいけないわけですから、そういうときというのはやっぱりいろんなところの感度も上がっていつちやうわけで、その影響で、腸の蠕動運動が活発化するという程度のことはあるんじゃないかと。

身体的感受性を高めること・身体情報をコントロールすること

身体感受性を高めることによって一番高まってくる感覚というのは皮膚感覚と、もう一つあります。それは体の内側に対する感覚なんです。体の内側の運動感覚というのが武道では大事なんです。ここ二、三年、ぼくは合気道学校で教えてるんですけども、このところ工夫していることがあって、そこには甲野善紀先生と会っていることを教えていただいたことがヒントになっていることがとても多いんです。甲野先生には二年前の十月に大阪のカルチャーセンターではじめてお会いしたんですけども、それから何度もお稽古させていただきましたが、教わって目からウロコが落ちたことが多々あります。

甲野先生によれば、指先と指先がコンマ一秒程度触れるだけで、それぞれ相手の体の中の感覚について必要な情報は一瞬のうちにやりとりできているんですね。特に接点の面積が多ければ、相手の体軸とか重心、力の方向、力の速さ、力の強さ……それくらいの身体情報というのはもう瞬間的に入る。それは頭に入って、向こうの体感がこっちの体感に複写されるような感じで伝わって

くる。その情報量は半端じゃなくものすごいんですよ。体から体に伝わってくる情報量というのはたぶん脳では処理できないくらい量の情報なんです。だから、脳を経由しないで身体から身体へ、潜在意識から潜在意識へという形で大きな情報の固まりが出入りする。

武道というのは、この巨大な身体情報を、どちらがどれだけコントロールするかを競い合う、一種の「情報戦」なんですよ。打ったり、蹴ったり、極めたり、投げたりというのは、その「情報戦」の結果、「そういうこともできる」ということであって、それ自体が目的じゃないんです。

スパイを使った情報戦と全く同じで、たいせつなことは、相手の身体信号はすべて取り込み、こちらの身体情報はできるだけ送らない。送る場合は、「偽の情報」を送って、相手の防衛システムを壊乱させる。スパイ小説でやっていることとほとんど同じことを身体レベルで行っているわけです。

まず最初にやるべきことは自分の身体感受性の感度を最大に上げておいて、接した瞬間に相手からの身体情報をできるだけ取り込む。だからアンテナですよ。アンテナの感度を上げておいて、相手から送ってくる電波を全部取ってしまう。逆に、こちらの情報に関しては一つ

も伝えない。そういう形の一方通行の体動をつくる。相手の防衛システムを機能させないためには、こちらの身体情報をできるだけ相手に送信しない。身体の接点において、「何かに触れているんだけど、その触れている何かが何を意味するかわからない」という情報不足の状態に相手を誘導すればいいわけです。

そうすると体術の場合どうなるかというと、動きがぴたりと止まるんですよ。普通は触れた瞬間にすぐ反応します。触れた瞬間に相手の力の方向・速さ・動きが予測できますからそれを予測して、瞬間的相手の動きに対応してこちらの身体が動く。ところが、接点から情報が上がって来ないと、動きようがないんです。人間の運動というのは基本的にすべて未来予測の上で動いていますから。例えば、野球のピッチャーが投げたボールをバッターが打つなんていう場合、あれは一八メートルのところを球が来る時間なんて一〇〇分の何秒くらいですから、見て反応して打ったのでは間に合わない。リリースする直前くらいところで、ここに来るといふ予測をして、バットコントロールをしないと間に合わないわけです。だから、甲野先生の使われる比喻を借りて言えば、マウンドに発煙筒を置いて、煙の中からボールが来るようにすれば、相当に遅いボールでもバッターは打てません。

相手の投球フォームからボールの速度やコースを予測することができなければ、打てるはずはありません。

人間はつねに未来予測をして動いている。ところが、身体と身体の接点のところで、こちらからの身体情報を与えないと相手は未来予測ができなくなる。予測できなくなると人間は動きを停止するのです。

当然ですよ。廊下を歩いていて、電気が急に消えて、あたりが真っ暗になったら、人間とりあえず足を止めます。「あ、電気が消えたー」と言って走り出す人間はいません。人の話を聞いていて、急に音が聞こえなくなったら、とりあえず息を止めて、耳を澄ませます。「あ、音が聞こえない」と言ってわめき出す人間はいません。そういうもんです。コミュニケーションの場で信号が途絶すると、人間は必ず「その場に止まって、息をひそめる」ものなんです。

非常に微細な音がかすかに聞こえてくる状態を想像してみてください。そのときどういうことが起きているかというと、ぼくらはこうやって耳を澄ますわけです。まったく聞こえてこないんだったら何の反応もしませんけれども、実際にはかすかに何かが聞こえてるわけですから。「何かが聞こえているのだけれども、その音が何を意味するかわからない」というときに、ぼくたちは耳を

澄ますわけです。ね。「耳を澄ます」ときというのは身体は止まるんです。身体を動かしながら「耳を澄ませる」ということはできないから。だから身体を止めて全身の体感の感度を上げる。息もあまり深くはできないから、わりと短く浅めになる。そして、どんな変化が生じても臨機応変に対応できるように、リラックスしている。

この「リラックス」というのが案外くせ者なんです。「リラックスしている」という言い方をするといいことみたいですが、実際には危険なことなんです。というのは、空間的な尺度で言う、たしかに身体はどこにも「詰まり」や「凝り」がなくて、適度に緩んではいるんですけれども、「耳を澄ませて」いる人間は、結局「現在」という時間の中に固着させられているわけです。空間的に停止して、身動きできない状態を武道では「居着き」といつて嫌うわけですけれど、同じように、

とっさに未来予測がきかなくなると、身体感受性を最大化しながら、「現在」という時間に繫縛されている状態も同じように時間的な「居着き」によって、ある時間の一点にのり付けされてしまっているわけですね。武道的にいったら、それが空間的であれ、時間的であれ、ある一点に繫縛されている人間は「死んでいる」と同じです。ですから、相手を「居着かせる」ように仕向けてし

まえば、活殺自在ということになるわけです。

だから、「耳を澄ます」というのは、武道的な立ち会
いの場では決して取ってはならない、非常に不利な構え
なんですね。同じ居着いているにしても、例えば、恐怖
心で身体がかちかちに固くなって身動きできないという
場合は、術をかける側からするとけっこう厄介なんです。
ぜんぜん反応してくれないから、コントロールしにくい
んですね。けっこう長く修業した人の技が恐怖心でが
ちがちになった素人さんにはかからないということが現
にあります。恐怖心が勝っている人の場合は、相手から
の身体信号を聞くことよりも、自分が耳を閉ざしてしま
って、亀が甲羅に手足を閉じ込めるようにぐっと体を固
くしてしまふ。身体感受性の感度を下げて、痛覚を消し
て、とにかく嵐が通り過ぎるのを待って、生き延びよう
とする。かなり原始的な生存戦略ですけども、ある意
味では、それなりに有効なわけです。現実の情報戦と同
じですね。ものすごいハイテクの情報兵器を備えたスパ
イも、交通機関が徒歩だけで、重要な情報はすべて知り
合い同士の口伝え……というような国では情報活動の展
開のしようがありませんから。それと同じです。「生兵
法はけがのもと」ということが言われますけれど、言葉
の通り、ある程度修業していて、術が使え、身体が動く

人の方が、実は武道的にはコントロールしやすいんです。

未来を体感する・時間を盗む

武道ではあまり強弱勝敗を論じるべきものではないの
ですけれど、あえて「強い」というのはどういうことか
というと、実はほんとうは空間的・物理的に相手を倒せ
ることが「強い」のではなくて、相手の時間を盗むこと
のできる人間が強い人間なんです。

「時間を盗む」という術理がわかってきたのは最近の
ことなんですけれども、わかりやすい例を挙げると、オ
ートバイのコーナリングがそうですね。バイクに乗って
る人ならわかると思うんですけども、バイクのコーナ
リングというのはコーナーに入る前に、コーナーを抜け
たときのイメージをはっきり持っていないと失敗するん
ですよ。コーナーを抜けながら、いまコーナーを抜け
つつある自分のリアルタイム体感に基づいてバイクを運
転していたらバイクのコントロールはまったくできない。
「コーナリングはイメージ」だっていろいろなレーサー
の方が言ってますけれど、まさにそのとおりで、「イメ
ージ」というのは言い換えると「未来の体感」というこ

とですね。コーナリングを「し終えた」ときの体感をはつきりと自分の内側に構成できる人は、そのとおりの未来を実現できるけれど、それができない人にとって未来は闇の中なわけです。逆に、コーナーに入る前に、うっかりとコーナーのクリッピング・ポイントでリアがずるっと滑るといような悪いイメージを持ってしまうと、これがまさにそのとおりにリアタイヤが滑り出す。それが一番危ないんです。

人間の身体というのはリアルタイムの外界の情報をそのつど吟味しながら、動いているのではないからです。すでに「青写真」が出来上がった「未来の体感」に合わせて全部の細部をコントロールしてるんですよね。設計図を書いてから建物を建築するのと同じです。設計図がなければ、どれだけ必要な材料や工具が整っていても、それをどこにどういう順番で並べていいのかさえ分からない。それと同じです。

コーナリングの場合は、ですからきれいに曲がりきった瞬間の体感をはつきりと実感として持てる人は、そういう結果が得られるように、全部の骨格とか筋肉とか腱とかが統一的に微細な動きをするんです。ところが、コーナーの真ん中でリアがずるっと滑るイメージを持ってしまったら、その想像された未来を実現するように潜在

意識が身体を操作してしまう。リアが滑るように滑るようにバイクをコントロールしちゃうわけですね。バイクのコーナリングではほんのわずかな身体の動きで、それこそ目線とか首の仰角とか手首の返しくらいですぐコースどりが劇的に変化する。

バイクに乗り始めたころいろいろなバイクの本を読みましたが、一流レーサーは例外なしに「コーナリングのときは必ずコーナーの出口を見るように」と言う。「出口を見る」ということは、要するに「曲がり終わった後の体感」をあらかじめ作っておきなさいということです。その体感の輪郭がはつきりしていると、その体感に向かって、ちょうどリールの中に釣り糸が繰り込まれていくように、身体がそこに繰り込まれていく。つまり、このときに未来は現在になっていて、現在は過去になっている。そこで時間の意図的な「ずれ」をつくるわけですね。「時間を盗む」というのは、そういうことです。

多くの師匠の多田宏先生は「技が終わった状態をしつかりとイメージして、そこに体を放り込む」ということをよく教えられます。技が終わったときをイメージしろ、というのは、みんな相手をきれいに投げている自分をイメージする。でも、相手を投げてる自分というのはどこから誰かが見てる図像なわけですよね。投げてる私が

そこにいて、投げられた人が向こうにいる。視覚的にはたいへん華やかだけれど、体感は弱い。視覚イメージだけだと、相手の内側にはなかなか入れない。だから、視覚イメージじゃなくて、先生は「音で待て」といわれらんです。合気道の場合だったら、相手を投げて相手が二間ほど飛んでいって、受け身を取るときに畳をばーんと打つ。そのときの音を切り取って、それをまず体感に登録していく。それから、投げ終わったときの自分の骨格とか筋肉とか息づかいとか、あるいは内臓の感覚とか、あるいは畳を踏んでいる足裏の感覚とか、そういうふうに来るの体感のデータをだんだんふやしていく。

そんなふうにして、技が終わった状態の「未来の体感」のデータが充実してくると、非常におもしろいことが起こるんです。先ほど申し上げましたように、身体と身体が最初に触れ合う瞬間というのは、ある種の情報戦ですから、触れた瞬間にこちらからの身体情報をとりあえず一度は遮断する。こちらの身体情報が非常に微弱だと、これからどういう種類の力が、どういう速度で、どういう方向に働くかということについての未来予測が相手には立たない。そうすると、向こうは「待ち」の状態にはまり込む。何かが起きているのだが、何が起こっているかわからない。そういうふうにして、時間的には

「現在」に居着き、空間的には「その場」に居着いてしまう。そして、短く浅く呼吸しながら、身体をリラックスさせてこちらの次の動きを探ろうとする……という状態になる。そのときに相手にわざと「偽の情報」を送るわけです。何の情報を送ってやるかというと、この接点からほかの「未来の体感」を送るんですね。いまのじゃなくて、未来の。つまり、投げ終わった状態のほく自身の体感を送るんです。これがちゃんと相手に伝わるんですよ。

臨機応変に対処すべく居着いている状態というのは、言い換えると、「真つ白」な状態なんです。だから、どんな色にでも染まる。ほかのほうは色がついてるけど、向こうは真つ白なんです。色がついてるものと真つ白なものでは勝負にならない。ほかの色がぱつと向こうに伝わる。ちょうど透明な水が入っているピーカーに青インクを一滴落とすとぱつと青くなるような感じで、接点からほかの未来の体感が相手の全身に伝わっていくわけです。

そうするとどうなるかというと、結局その人はほかの「未来の体感」を構成する「要素」になってしまいうわけです。つまり、ほかが設定した「未来の体感」を「現在」だと思い違い、「現在」を「過去」と思い違えて、「現

在」に追いつこうとして、あわてて時間の流れをそのままこちらが作った設計図通りに進んでゆくんです。

だから、術が理想的にかかった場合には、実際に相手を投げる必要さえないわけです。だって、相手が自分から進んで空中に飛び上がって、勝手に畳に転がってくれるのですから。さきほどバイクのコーナリングで「悪いイメージ」を持つてしまうと、魅入られたように身体が動いて転倒してしまうという例を挙げましたが、本質的にはそれと同じことです。

ですから、これは敵味方とか勝ち負けという話と、いささか次元の違う話なわけです。

山岡鐵舟は江戸開城のときに、特使として東海道の官軍の陣営を突っ切って西郷隆盛の本陣まで一気にたどりついた逸事で知られていますけれど、そのときに「朝敵徳川慶喜家来山岡鐵太郎大総督府へ通る」と大音あげてずかずかと敵の鉄砲隊の前を通り過ぎたのに、誰も止めることができなかったと伝えられています。こういうのはもう強い弱いという水準の出来事ではないですね。この「勢いに吞まれてしまって、あつけにとられているうちに……」という表現が示しているのは、山岡鐵舟が悪鬼羅刹のごとき表情をした巨漢であつて近づきがたかつたということではなくて、官軍の将兵が「何が起こつて

いるのか、よく分からなかった」ということではないかと思えます。おそらく鐵舟は一瞬のうちに官軍兵士を「居着き」の状態に追い込むことのできる達人だったというのではないかとぼくは考えています。

同じような逸話は開拓時代の英雄であるワイアット・アープについても伝えられています。アープはドッジシティやツームストーンといった暴力が支配するような街で保安官をつとめたわけですが、実際にはほとんど銃を抜いたことがないし、人を殺したこともない。銃を手にした何十人に囲まれても平気で相手を殴り倒して、そのまま一喝して追い返すというような芸当ができたそうです。生涯に無数の銃撃を受けただけで、一発も当たらなかったという伝説もありますから、これをただ「胆力のある人だった」というだけではすまされないと思います。やはり、相手からすると「気がついたら、先手を取られていた」というタイプの人だったと思うのです。こういうのはコンマ何秒で銃を抜けるとか、腕力が強いとかということと、ぜんぜん違う種類の能力だと思えます。

アドバンテージを取る

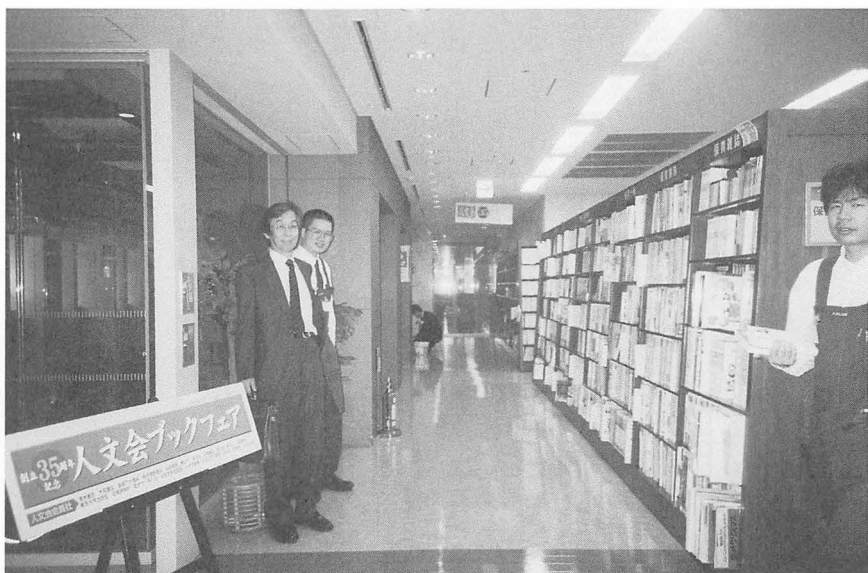
武道に限らず、人間と人間が出会ったときにはおそろく程度の差はあれ、必ずこのような種類の「時間的なアドバンテージの取り合い」が行われているんじゃないかなとぼくは思います。そして、この技法は剣を強く早く振り回す能力とか、銃を早撃ちする能力とかというのは違って、すごく汎用性が高い技術じゃないかなと思うんですよ。

皆さんの中にはビジネスをされてる方もいると思うんですけども、ビジネストークの場合、二人の人間が「仕切る」かというところ、結局未来についての明確な体感を持っている人に引きずられるんですよね、それは相手からするとつねに「何を考えているのか分からない人」なわけなんです。でも、ビジネスでも結局は、時間的なアドバンテージを取った人間の「勝ち」なんですよね。別にお金の計算が早いとか、利益がいくら上がるとか、これこれこういうようなデータがあるとか、そういう水準の話じゃなくて。データなんて関係ないんですよ。データの意味するところについての「確信」の問題なんです

よ。未来ってまだ起こってないですから、何でもいえるんです。でも、「未来はこうなる」とはつきり感じることもできる人と、未来はどうなるかわからないと思っている人間が対峙し合った瞬間には「未来はこうなる」と確信している人間が必ず先手を取ってしまうんです。だから、そういう明確な未来像を持つために、みんなプレゼンテーションするときには一生懸命データをそろえたりしていくわけです。特に広告代理店の人なんか「これからは何々の時代だ」ということを必ず言うのは、要するに「おれは未来像を持つてるぞ」ということをいった人間がビジネスをコントロールできるということを直感的にわかっているからです。

これはありとあらゆる場合で起こるんですね。武道をやっている人によくわかったんですけども、アドバンテージはほんとうに一〇〇分の一秒でいいんです。一〇〇分の一秒でも先を行けば相手は着いてくるしかない。だから、そんなにたくさん進む必要はないんです。

学校で授業をやるときでも、こういうところで講義をやるときでも、結局は一緒なんですけれども、聴いている人に先回りされたら負けなんですよね。つまり、さっきの話じゃないですけど、「あいつはこんなことを言うだろう」と思われて、そのとおりのことを言ったらもう



ジュンク堂大阪本店での人文会主催のブックフェア

「負け」なんです。何を言うかわからない。話をどっちへ持っていくのかわからない。学生さんであっても、こういう講演の場合であっても、聞いてる方たちが「この人は話をどこに落とすかわからない」という不安を抱いてくれないとだめなんですよ。ご本人がどんなにほくの話を聞きたいと仮に思っているとしても、どこに話が落ちるかわかったとたんに、テンションが一気に下がって、もう聞くことができなくなってしまうんです。気持ちには聴きたくても、身体が「いやだ」というて聴かせてくれないんです。

だから、教師であるとか、あるいはこういうところでしゃべる人間であっても、物書きであっても、次に何をいうかわかられちゃ困るわけですよ。それが大変なんです。常に虚を衝かないといけないんです。

このことに関しては、ほくは範として仰いでいる方がおります。それは内田百閒先生です。百閒先生は法政大学と陸軍士官学校などでドイツ語の先生をされてたわけです。ほくもフランス語の教師をしておりますから、大学一年生に語学の授業を教えるということが、けっこう大変なのはよくわかるんです。だってあちらには学ぶ必然性がないんですからね。たまたま必修だからフランス語とかドイツ語をとっているわけで、そういう人たちに

九〇分間授業を聞かせるのってけっこう大変です。おまけに教科書というものがありませんから、きょうはどこまでやるということは大体向こうもわかってる。あまりモチベーションがない学生相手に、かつ向こうにかなりの程度まで手の内を知られてる。その条件でなおつねに学生さんたちを「絶対的な遅れ」のうちに取り残して、教師が一秒でも二秒でもいいから、アドバンテージを維持していなくちゃいけない。そのためには、「この教師は次に何を言うかわからない」ということを学生に刷り込んでおくことがたいせつなんです。

厳しい言い方をすると、こういう会場とか教室というのは、「本番」なわけです。それはむかしの侍にとつての戦場と同じわけです。「道場は楽屋、実生活は本番」といいますけれども、やっぱりここが本番なわけです。だから、そこで先手が取れない人間は、それ以外のものつとリスクの高い場になつても、やはり先手は取れない。何の予備知識もない人たちを相手にしても、その人が登場したとたんに、「この人は何をするんだろう」と座が水を打ったようにしーんとなるというようなことができないといけません。そういうことができる能力というのとはつかみがうまいとか、声が大きいとか、知識が豊富であるとかいうこととはぜんぜん関係がないです。

その瞬間、そこにいるほかのすべての人よりも、この人の方が一〇〇分の一秒でも時間的なアドバンテージを持つていて「先を取られた」ということを全員に一瞬のうちに了解させることができなければ、そういうことはできないです。それをばくは「時間を盗む」技術だと申し上げたわけです。

武道をやっている人の中にも、道場に来たときに道衣に着替えて稽古している間はなんだかずいぶん厳しい顔つきをしているけれど、稽古が終わると、とたんに「普通のおっさん」に戻ってしまう人つて、けっこう多いんですけれども、それは本末転倒だと思います。極端な話、道場はどんな実験をやつてもいいわけです。というか、道場は実験のための場所なんですから。いろんな術理的な仮説にもつづいて、技を工夫したり、動きを変えたり、いろいろなことをして構わない。そこで別にうまくいかなくてもいいわけです。道場というのはいくら失敗しても構わないんです。いくら失敗してもよい場所なんです。だから、真剣に失敗すればいい。でも、道場を一步出たら絶対に失敗しなきゃいけないわけです。

多田先生からこんな逸話を聞いたことがあります。以前、古武道大会があつて、演武者控え室で見ず知らずの武道家が二人並んで控え室で座っていました。一人の武

道家が見知らぬ武道家に向かつて、「おたくの流派ではこうやって手を持たれたときはどうやって返すんですか」というふうな質問をした。問われた武道家は、「じや、ちよつと手を持ってごらんさい」と言つて無造作に片手を出した。その瞬間に尋ねたほうの武道家が小指をつかんでぽきつと折つた、という話があるんです。多田先生はその話だけをしたあとに「これは折られるほうが悪い」とだけおしやつた。これも不条理なエピソードなんですけれども、何年も噛みしめているうちにだんだんその教えが分かつてくるという種類の味のある逸話ですよね。ほくは、ここには武道に限らず、人間と人間が対面するときの大事な教えがあると思つています。

指を折られた方の武道家は、「この人もまた自分と同じような常識ある市民であろう」ということを不当に前提していたわけですね。市民的常識に安住した人間というのは、やはりある意味で「居着いている」わけですね。居着いた人間は、必ず先手を取られてしまうんですよね。そして、相手が居着いた瞬間に、それを咎めるということが武道家のいわば本能的な身体反応なわけですから、指を折るのは武道家としての「常識」なんです。

はじめに「おたくの流派ではどうやるんですか」というふうに訊いたとき、この人は別に害意があつたわけじ

やないと思うんです。ただ興味があつたから、聞いてみたわけですね。そういうことを訊かれたら、「いやー、それはどうぞ演武でごらんください」とさらつと流すのが普通ですし、どうしても言われたら、自分の受けを取る弟子を呼んで、それを相手にして術を見せるくらいのことにはするでしょう。でも、相手がどれほどの技量の武道家であるかを知らないままに、「はい、どうぞ」と無防備に手を差し出してしまったのは頂けません。これはちよつと武道家にしては問題です。だから、相手の隙を組織的にとがめるといふ武道家の「義務」に従つて小指を折つてさしあげた、ということじゃないかなというふうに思ふんです。

そこで行われていることは別に強い弱いじゃないんですよね。強い弱いとか、動きが速いとか遅いかというレベルの話じゃない。そうではなくて、どっちが「先手」を取るか、どちらが時間的なアドバンテージを取るか、ということですね。どっちかが居着いてしまった。居着いて、ある時間、ある空間、あるフレームワークの中で停止してしまつた人間と、一〇〇分の一秒でも一〇分の一秒でもアドバンテージを取つた人間ではもう勝負にならない。どうやって相手の未来を盗んでいくか。それはたんに武道的な問題にとどまらず、非常に汎用性の高い

技法ではないかなと思っっているんです。

論理に時間を取り入れる

話が飛びますけれども、ぼくはポスト・コロニアリストとかフェミニストとどうも相性が悪くて、つい批判しちゃうことがあるんですけども、そのときの基本的な論法はよく考えるといつも一緒なんです。それはこの人たちが依拠している論理モデルが「無時間モデル」だということなんです。時間というファクターが入ってないんですね。論理的に正しいとか間違っているとで言い合うレベルというのは、結局「無時間モデル」でしかないんです。「無時間モデル」に固執していると、当たり前ですけれど、時間ファクターの力学が分かっている人間には必ず先手を取られてしまう。だから、注意しましょうね、ということをお願いしているんですけど、これがなかなかうまく伝わらない。

たしかに、論理の中に時間のファクターを入れて考えるというのは、三次元モデルを四次元モデルにするわけですから、論理の次数を一個上げなきゃいけないのでけっこうむずかしいんですけど、これをきちんとしたひとつ

つの思考の技法や身体運用の技法として体系化していくということとは、とてもたいせつなことじゃないかなと思うんですね。いま同時代のいろんな人の書いてるものを読んでいて感じることは、やっぱり時間性が欠落しているなあ、ということですね。非常に古典的な時間意識の中にみんな安住していらつしやる。だけど、時間というのはいまとなんかもので、過去と未来を自在に行ったり来たりできるものじゃないでしょうか。

前にも言ったけど、一つおもしろい話があります。K1の武蔵さんという方とひと月くらい前に一緒にご飯を食べる機会があったんです。ぼくの膝を治して頂いている三宅安道先生という方がK1の主治医をされているので、そのご紹介で一緒に芦屋のベリーニというイタリアンレストランでご飯を食べたんです。

武蔵さんにはぜひ聞きたいことがあると思っていたので、会って握手してよろしくと言って、開口一番「質問していいですか」と言ってすぐに質問したんですけども、ぼくのそのときの術理の理解だと、武道的に一番大事なことは身体感受性を高めるといふことであると。身体感受性を高めていって、非常に精密な反応をするということがとても大事だと思っていたわけなんです。ところが、K1みたいなリアルファイト系の場合は実際に殴られた

り蹴られたりするわけですよ。相手のパンチがヒットしたときというのは非常に危機的な状況なわけですよ。危機的状況のときに生き延びるためには、当然のことながら身体感受性を最大にさせなきゃいけない。だけど、身体感受性を最大化してできるだけ精密な身体感覚で身体を使おうとすると、当然痛覚も最大化するわけだから、すごく痛いはずですよ。

「全細胞の感度を最高に上げていくということと、痛みをどうやって転移コントロールするかということの矛盾を武蔵さんはどのように解決されてらっしゃるんですか」と、ややこしい質問をいきなりしたんですけれども、武蔵さんは即答されたんですよ。

「パンチが入ったときは、二発先のパンチを打ってる自分のほうをイメージする」と。

このあと自分のワン・ツーが相手の顔にクリーンヒットして相手がダウンしている。その未来のパンチ、二発目先のパンチのほうに意識を集中させる。そうすると今たしかに殴られてはいるんだけど、いま殴られてるのは「過去」になる。だから、自分のどのパーツにどういうダメージがあったかということは、データとしてははっきりわかっているけれども、もう痛くない。ダメージに関する全情報はきちんとクリアに登録されているけれ

ども、痛みはリアルじゃない。だって、それは二発分「前」の話だから。自分のパンチが当たってクリーンヒットして相手は倒れてるんだから、と。そう即答されたんで、ああなるほど、やっぱりそうなんだと。格闘技の世界、K-1みたいなところで起こっていることもよくたち合気道みたいな、どっちかというとおとなしい武道でやっていることも、術理は本質的には同じであって、時間のせめぎ合いというか、どっちが未来を取るかということの競争をしているわけだな、と。より素早く相手からたくさんの時間の未来を盗んだ人間が勝負をコントロールできるんだということがわかったんですね。

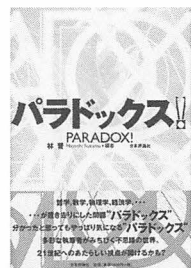
だけど、武蔵さんがK-1の実際のリングの上で経験的に獲得してきたような技法というか、時間意識とか時間論というものを骨肉化している人が一方にいながら、歴史学でも社会学でも政治学でも、学者が構築している社会理論の中に、時間の考え方というものをしっかりと繰り込んで体系化しているという試みを、ばくはあまり見た記憶がないんですね。

なんだかここでも身体のほうが頭に先行していて、結局頭だけで考えている人たちというのは身体でものを考える人間に先手を取られているんじゃないか、という気がするわけです。

ぼくは本屋さんというのは多分永遠になくならないと思うんですけども、それは本の持つてゐる物質性を経由したほうが、書き手がそこに込めたものがある種の信号として、ここに來た人たちの中に届くと思うからです。実際は本屋さんというのは静かな場所じゃなくて、ものすごい勢いで蜂の巣をつついたみたいな感じで、全部の本がさまざまな信号をおんぶん発信している。その無数の信号の中から、自分に必要な信号をより出して聞いていくとする。また、そこに來た人は非常に身体の感受性を高めてるといふ、そういう真剣勝負の場じゃないかと思うんです。そういう場はこういう形で物質性に担保しないと成立しない。だから、書籍という情報媒体も書店という業態も決してなくならないと思います。

そういうわけで人文出版系の方たちも、さらにジュンク堂さんもますます頑張っていただきたいと思っております。特にジュンク堂さんは座り読みができるとか、お茶を飲みながら読むことができるということです。こういうところでコーヒーを飲みながら本を読めるというのは書店を「バザール」的なものにしたというような直感があつてされてるんじゃないかと思うんですけども、そういう場を今後とも頑張つてご提供いただきたいと思つております。今日ははともありませんがとうございました。

※ 本稿は二〇〇三年十一月八日（土）、大阪・ジュンク堂書店本店における人文会主催のセミナーでの講演を一部省略して掲載いたしました。



『パラドックス』

林 晋著

初版二〇〇〇年八月刊

四六判二三九頁

本体一六〇〇円（定価一六八〇円）

＊高速宇宙旅行をして帰ってきた兄と地球に留まっ

いた双子の弟は年齢が違う!? という双子のパラドク

ス。一見正しいことが間違っていることや、間違ってい

そうだが正しいことをパラドックスという。その不思議

な世界十二話を紹介したオムニバス。タイムマシン、ア

キレスと亀、ヴィトゲンシュタイン、集合論などなど。

どんなに明瞭で、客観的にみえる科学、学問でもその

背景には、多くの暗黙の了解がある。理論体系以前の未

だ言葉になっていない「思考の枠組み」のようなものが

ある。パラドックスは、その暗黙に前提された思考の枠

組みをチクタクと刺すトゲなのだ。かのアインシュタイ

ンは最初から矛盾していない理論は見込みがないといっ

たそうだ。佐藤勝彦、内井惣七、大澤真幸、野矢茂樹、

松田卓也、など、多彩な執筆者が織り成す不思議の世界。

正座して読むもよし、寝転んで読むもまた楽し。



『ミューズの思想』

松宮秀治著

初版二〇〇三年十二月刊

四六判二七六頁

本体二五〇〇円（定価二六二五円）

ミュージアムというと、静かで、安らぎを与える場所

として考えられているが、明治時代以前の日本人にとつ

てはそれはすなりと受け入れられるものではなかった。

幕府の遣米使節団副使、村垣淡路守範正がそれに関して

貴重な証言を残している。村垣はワシントンのスミソニ

アン・ミュージアムを訪ね、そこに展示されている歴代

のアメリカ大統領の毛髪を見て、西欧人の「礼なき此一

事にて知るべし」と断じ、ミュージアムのもつ暴力的な

までの攻撃性に不快感を示した。

本書は、このミュージアムというものがいかにして生

まれ、拡大発展しつづけていった思想であるかを、西欧

における王権と教権の関係、精神分析学、ユートピア文

学やヌード論など多岐にわたる問題に触れながら読み解

いていく。近代ヨーロッパ史の最も基礎的で、最も深層

的な問題を考えるうえで必読の一冊と思われる。

●わが社の一冊*平凡社



『増補 無縁・公界・楽』
 網野善彦著 笠松宏至解説
 初版一九七八年六月刊
 増補版一九八七年五月刊
 平凡社ライブラリー版一九九
 六年六月刊
 ライブラリー判・三八〇頁
 本体二六五円(定価二二三円)

二〇〇四年二月に逝去された歴史家・網野善彦の代表的著作。近世の縁切寺、中世の市、古代のアジールなど、これまで歴史の表舞台に登場しなかった人々や場のうちに、所有や支配とは別の〈無縁〉の原理を見出し、その展開と衰微を跡づけ、人間の本源的自由とは何かについて、普遍的な問題を提起する。

網野氏が初めて教壇に立った高校で生徒から発せられた二つの質問、「なぜ天皇は滅びなかったのか」「なぜ平安・鎌倉期にのみ、すぐれた宗教家が輩出したのか」を考えつづけた、一つの回答であったという。本書には、この難問に実証的に立ち向かおうとした歴史家・網野善彦の真髓が横溢している。その反響は専門家のみならず一般の読者に及び、西洋史の阿部謹也氏の仕事とともに、日本に「中世史ブーム」「社会史ブーム」をまき起こした。日本の歴史学の流れを一変させた決定的名著である。

●わが社の一冊*法政大学出版局



『ヒロシマ [増補版]』
 ジョン・ハーシー著
 石川欣一、谷本清、明田川融訳
 増補版二〇〇三年七月刊
 四六判二五二頁
 本体一五〇〇円(定価一五七
 五円)

ピュリッツァ賞作家ハーシーによる史上最初、原爆被害記録です。小局の処女出版として一九四九年四月に刊行されると同時に大きな反響をよび、原水爆禁止・核廃絶の運動に大きな影響をおよぼしました。

本書は、そのご半世紀にわたって版を重ねてきました。が、「ハーシーの『ヒロシマ』」さえ忘れられつつあります」という秋葉忠利・広島市長の平和宣言(二〇〇二年)のように、戦争の悲劇、原爆の惨禍の記憶がしだいに薄れつつあります。そのことを痛切に受けとめた小局では、新たに版權を取得し、昨年七月、全面新組による増補版を刊行いたしました。六人の被爆者の体験と見聞をリアルに描いた初版に加え、増補版では原爆症との闘い、市民としての生活・仕事・活動など、稀有な体験者たちの戦後の軌跡をヒューマンな筆致であとづけます。日本中のの人に読んでいただきたい「わが社の一冊」です。

●わが社の一冊*みずす書房



『磁力と重力の発見』(全3巻)

山本義隆著

初版二〇〇三年五月刊

四六判一〇六四頁

定価 一巻 二九四〇円 二

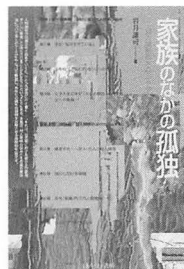
巻 二九四〇円 三巻 三二五

〇円

本書の面白さは、タイトルにもあるように物理学を中心とした「理系」の書籍でありながら、右開きで縦書きという点です。これは著者である山本義隆氏が、「どちらかというと文系の本」という前提で、全くの一般読者を対象に書かれたためです。理工書＝数式という考えを打ち破ったことで、「小説のように読めた」という意見が多数寄せられたことは、著者の意図が幅広く受け入れられ、科学史という学問が、「一般」のレベルで学べることの証でもあります。全3巻に及ぶ壮大な科学史を、在野の研究者が書き上げたことも話題の一つです。

予備校の講師を勤めながらの仕事は、アカデミズムの世界に一石を投じました。また、「パピルス賞」「毎日出版文化賞」「大佛次郎賞」の3賞を受賞し、長年の研究と読みやすく平明な記述は高い評価を受けました。「魔術としての磁力」を軸に展開される、わくわくする物語。

●わが社の一冊*ミネルヴァ書房



『家族のなかの孤独』

岩月謙司著

初版一九九八年三月刊

A5判三一四頁

本体二五〇〇円 (定価二六二

五円)

知識人や高学歴の人がキレるのはなぜか。親が子どもに自分の七がけの幸福しか望まない、といったケースがあるのはなぜか。本書では、著者がこれまでに出版した二千件以上のケースをもとに、対人関係の悩みとその真の解決法について、手記、Q & A、コラムなどを交えながら、具体的に解説し、人間関係の問題は突き進めていくとひとつの原因に行き着くとする。たとえば、幼児期に親からの愛情や、やさしい眼差しに満たされることが少なかった体験などが、幼少期における親子関係のゆがみとなり、いまの対人関係に影響を与えつづけているのだと。「人の心の真実があますところなく解説されていて、まさに人間理解のための決定版」「本当にこの本に出あえてよかった」など、読者の方からも高い評価を受けています。一九九八年の刊行以来順調に版を重ねる「対人関係のメカニズム」を理解するための必読の書。



第 37 期（2003 年度）人文会年次総会報告

第 37 期（2003 年度）の人文会年次総会は去る五月二十一日に熱海後楽園ホテルにおいて全会員社出席のもと開催されました。

代表幹事には昨年に引き続き大江治一郎氏（東京大学出版会）が選出されました。

議事は、昨年度の全般的な活動報告から始まり、会計報告、各委員会の活動報告、そして役員の改選を行い、無事終了いたしました。

今総会にて慶應義塾大学出版会（坂上弘社長）が、承認議決を経て新たに人文会に入会されました。

また、有斐閣より提出された休会申請は了承されました。

委員会構成は昨年に引き続き販売委員会の下に企画・調査・図書館の 3 グループ、広報委員会の下に広報・ホームページの 2 グループ体制を継続することになりました。

この組織を有効に機能させ、人文書のより一層の普及につとめる所存でございます。今後とも宜しくお引き立ていただきますようお願い申し上げます。

役員及び委員会構成員の詳細につきましては巻末の人文会名簿をご参照ください。

なお、「代表幹事ご挨拶」「各委員会の活動方針」は次号にてご報告申し上げる予定です。（書記：新保）

三省堂書店札幌大丸店／丸善南一条店／リーブルなにわ／北海道大学生協クラーク店

会員社 21 名／同行販売会社様：関口晴生（トーハン書籍仕入マネジャー）・逸見 剛（日販書籍仕入第 2 課長）・秋山隆博（大阪屋東京本部書籍仕入課長）計 3 名 総勢 24 名

10.25 『人文会ニュース』90 号刊行

11. 8 人文会創立 35 周年記念セミナー（ジュンク堂書店大阪本店）

講師：内田樹「レヴィナスから映画・武闘論まで」 主催：ジュンク堂書店・人文会

11.14 人文会創立 35 周年記念・第 132 回紀伊國屋セミナー（新宿・紀伊國屋ホール）

講師：養老孟司「ニホン人の壁」 主催：紀伊國屋書店・人文会

11.18 例会（出版クラブ会館）

●広島フタバ図書世良社長・佐々岡部長・池田氏来会。出店のご挨拶。

12. 1 「人文書のすすめⅢ」刊行

12.17 例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）

●大阪田村書店田村社長・大阪屋山本部長来会。リニューアルオープンのご挨拶。

1.21 例会（出版クラブ会館）

1.30 第 27 回出版五団体合同新年会「ホテルエドモント」

2.18 例会（文化産業信用組合本部会議室）

●東京事業連合射場氏来会「読書マラソン」についての説明

3.17 例会（文化産業信用組合本部会議室）

3.24 啓文堂グループとの研修会（京王書籍販売本部にて）

3.30 『人文会ニュース 92 号』刊行

4.14 例会（出版クラブ会館）

4.14 トーハン専門書・仕入グループとの研修・懇親会（神楽坂「エミール」）

5.21 第 37 期（2003 年度）人文会総会（熱海後楽園ホテルにて）

平成 15 年度人文会活動報告（全般）

- 5.16 第 36 期（2002 年度）人文会総会（箱根「紫雲荘」にて）
会計報告／各委員会活動報告／幹事・委員長選出と各委員会メンバーの
編成
- 5.27 人文会創立 35 周年記念書店座談会（東京大学出版会会議室）
テーマ：「21 世紀の人文書の棚…35 歳の主張」
出席書店：往来堂書店 笈入健志／紀伊國屋書店新宿本店 和泉仁士／
くまざわ書店桜ヶ丘店 宮下美紀子／ジュンク堂書店池袋本店 澤樹伸
也／株式会社ブックワン 瀬尾俊二／丸善日本橋店 小松原俊博／リブ
ロ池袋店 松下康子／司会進行 新保・段塚・田崎
- 6.18 例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）
●国立情報学研究所川瀬課長と紀伊國屋安藤理事来会。「Webcat Plus」
について説明とデモ。
●トーハン書籍営業部 野村部長，鶴巻シニアマネージャー，関口マネ
ージャー来会。トーハンの現状について報告。
- 6.23～7.11 人文会セット店グループ訪問
新潟・群馬グループ（7.10～11）／名古屋・豊橋グループ（6.26～27）／
京都・大阪グループ（6.23～24）／神戸・広島グループ（6.20～21）／福
岡・北九州グループ（7.4～5）
- 7.16 例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）
＊例会に先立ち臨時総会の開催：担当者の変更と所属委員会の変更，書
記幹事・35 周年委員長の変更の承認
- 8.20 例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）
- 9.24 例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）
●ジュンク堂岡専務，大阪屋山本部長来会。ジュンク堂名古屋店出店の
挨拶。
10. 1 『人文会ニュース』35 周年特別号刊行
- 10.16～18 人文会研修旅行（札幌地区）
訪問書店様：東京旭屋書店札幌店／紀伊國屋書店札幌本店／紀伊國屋書
店平岡店／紀伊國屋書店札幌ロフト店／コーチャンフォー美しが丘店／

人文会会員名簿

〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学出版会内

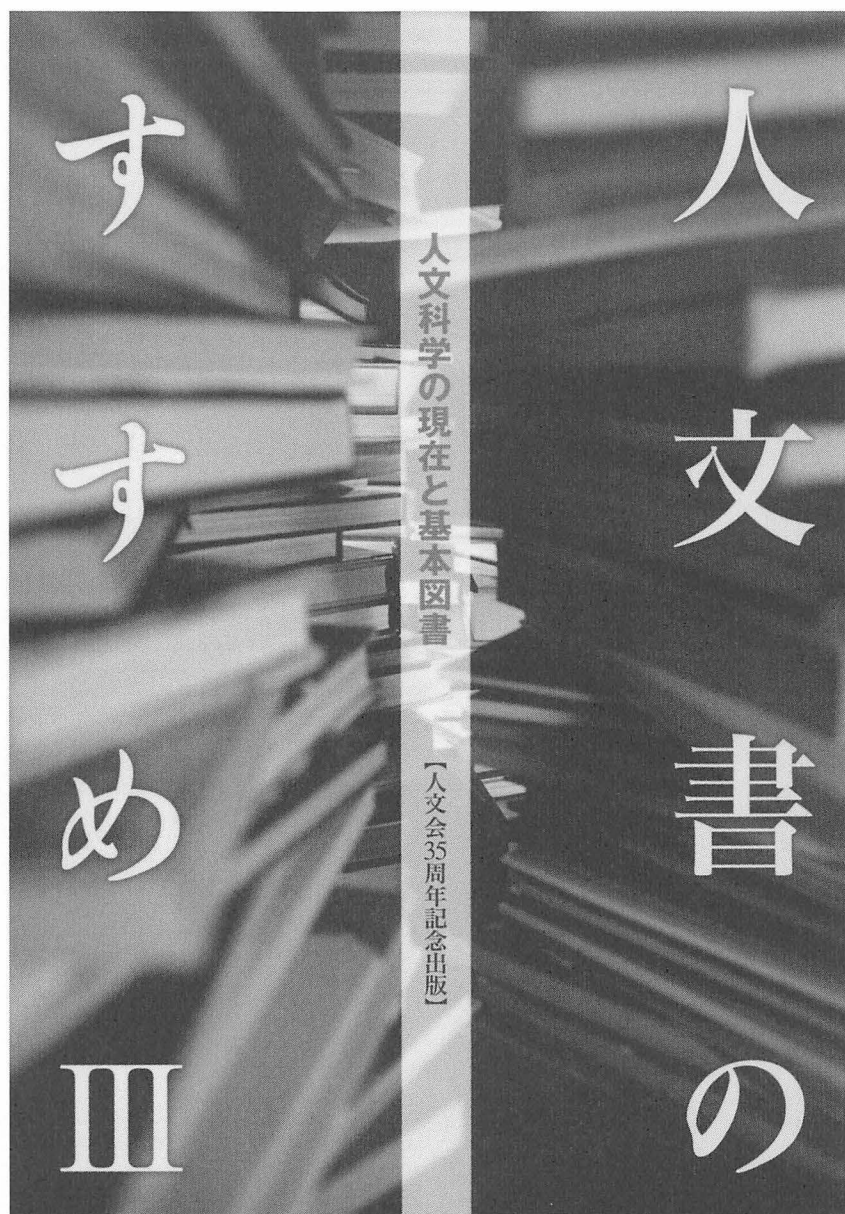
2004 年 5 月末現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
青 木 書 店	古川 清	175-0092	板橋区赤塚 8-12-12	5997-4051	5967-7691
大 月 書 店	大和 定幸	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚 省吾	150-8513	渋谷区東 3-13-11	5469-5918	5469-5958
勁 草 書 房	古賀 宣貴	112-0005	文京区水道 2-1-1	3814-6861	3814-6854
慶應義塾大学出版会	小林 文生	108-8346	港区三田 2-19-30	3451-6926	3451-3124
春 秋 社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	島田 孝久	101-0021	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
誠 信 書 房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
創 元 社	華園 齊	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草 思 社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑 摩 書 房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	大江治一郎	113-8654	文京区本郷 7-3-1	3811-8814	3812-6958
日 本 評 論 社	江波戸 茂	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	佐藤 英明	101-0052	千代田区神田小川町 3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	藤代 俊久	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル)	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町 1	075-581-5191	075-581-8379
未 来 社	西谷 能英	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
有 斐 閣	(休会中)	101-0051	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
吉 川 弘 文 館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 大江治一郎
 会計幹事 平石 修
 書記幹事 新保 卓夫

(◎委員長 ○副委員長)

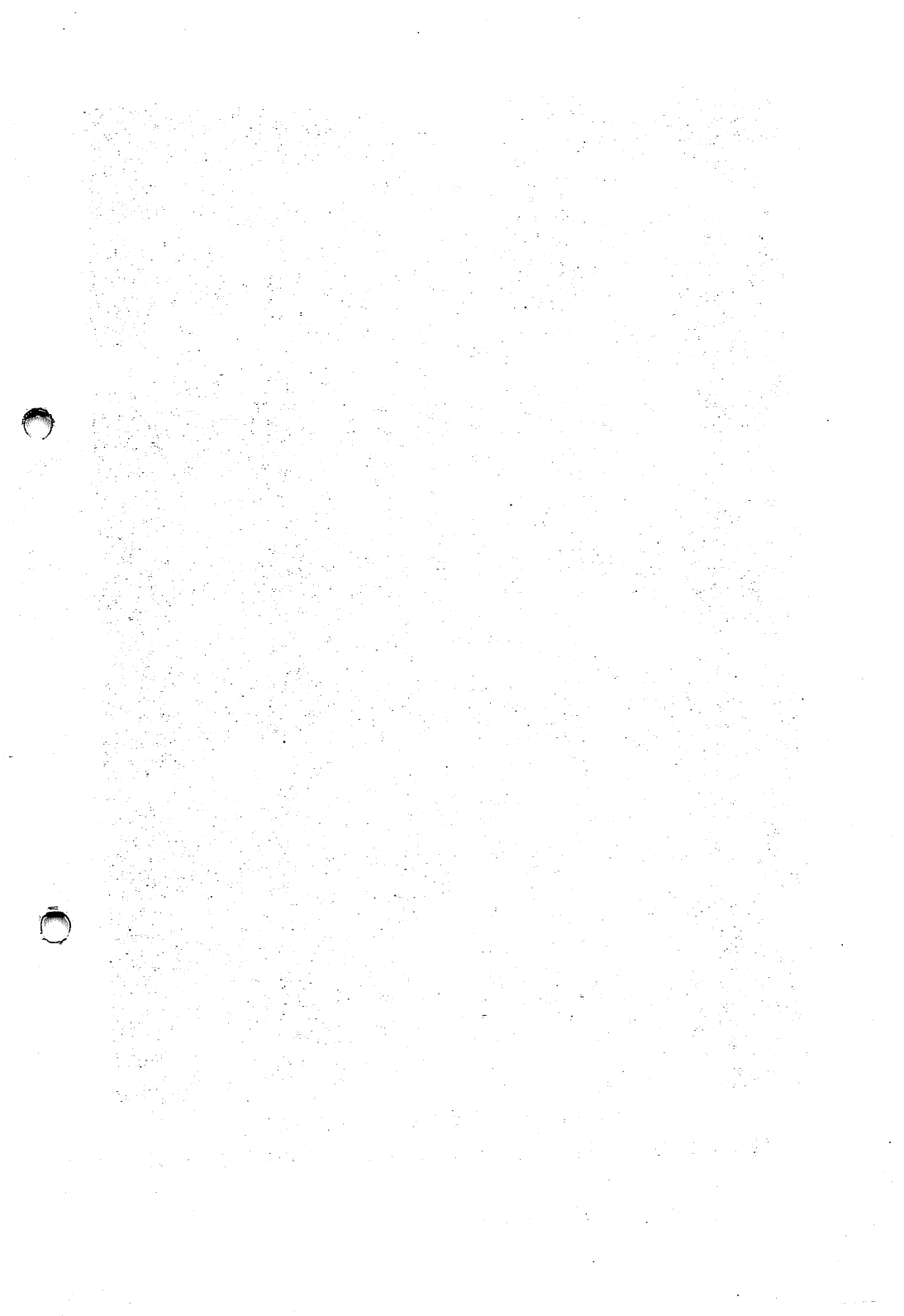
販売委員会 ・企画グループ ◎浴野 英生・西谷 能英・華園 齊・小林 文生
 ・研修グループ ○田崎 洋幸・大和 定幸・古賀 宣貴・古川 清
 ・図書館グループ ○杉田 啓三・段塚 省吾・馬場 正彦
 弘報委員会 ・弘報グループ ○佐藤 英明・島田 孝久・藤代 俊久・成田 共助
 ・ホームページグループ ◎鎌内 宣行・平川 恵一・江波戸 茂



人文会 35 周年記念出版『人文書のすすめⅢ』

2003 年 12 月 1 日刊行 定価 2625 円（本体 2500 円）288 ページ
申し込みは下記まで

誠信書房 (T) 03-3946-5666 (F) 03-3945-8880



法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

D・ヒューム／斎藤・一ノ瀬訳 人間知性研究

『人間本性論』第一巻を書き直す試み。因果論を深め、自由と必然、奇蹟や摂理などを新たに論じた人間性への信頼と期待の書。4935円

C・ノリス／時実早苗訳 ポール・ド・マン

一貫した「美学イデオロギー」をド・マンの中心的命題としてとらえ、その方法の核をなす「修辭的読の主張」を読み取る。4305円

米国のメディアと戦時検閲

スウィーニー 言論の自由を標榜する合衆国で第二次大戦期に実施された「自主検閲」とは何か。——その驚くべき実態を明らかにする。土屋・松永訳/4200円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

世界各地の少数言語の現状を幅広くとりあげながら、言語の「死」と「再生」の過程を、明快に分析。社会言語学の観点から「言語帝国主義」に警鐘を鳴らす。

クロード・アジェージュ 糟谷啓訳 絶滅していく 言語を 救うために

●定価7140円（本体6800円）

白水社

<http://www.hakusuisha.co.jp>

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 fax.03-3291-8448

戦争とテレビ

カミングス 朝鮮・ヴェトナム・湾岸戦争の「報道の客観性」はいかに組み立てられたかを検証する。渡辺将人訳 二四〇円

ある学問の死

スピウアック クローバリスムのさなか大学教育や文学研究はいかにあるべきか。来るべき学問論 上村・鈴木訳 二五〇円

黒部物語

志水哲也 「黒部八千八谷」と呼ばれる険しい自然のきらめきを、登山家で写真家の眼から捉えた写真エッセイ集 三三〇円

ダンテ『神曲』講義

今道友信 碩学が読む「詩人哲学者」ダンテの世界。マルコ・ポーロ賞受賞作に全面的な改訂を施した決定版。三〇〇円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷 5-32-21 <http://www.msiz.co.jp>

第2回小林秀雄賞受賞!

会社は これから どうなるのか 岩井克人

気鋭の経済学者が会社の「しくみ」をやさしく語る、数多くのメディアで絶賛された話題の本。 ●定価:1680円(税込)

平凡社

〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4
TEL 03-3818-0874 FAX 03-3818-0674

コーラ プラトンの場

ジャック・デリダ著 守中高明訳
ポイエーシス叢書52 1890円
プラトンの読解から、〈場〉が脱構築される。フェミニズム、建築の思考にも深い影響を及ぼした事件の書物。

写真でつづる宮本常一

須藤功編 5040円
民俗学者・宮本常一の生涯と人間像をつたえる写真集。掲載写真400点余り。

証言のポリティクス

高橋哲哉著 2310円
最新批評集。哲学と政治の交叉するところで、何が真に問題となっているのか。

未来社

※価格は税込

東京都文京区小石川3-7-2 〒112-0002
tel.03-3814-5521 <http://www.miraisha.co.jp>

■ ■ ■ 図書 創元社 ■ ■ ■
出版
<http://www.sogensha.co.jp/>

EU

—欧州統合の現在—

辰巳浅嗣編著 定価2,940円(税込)

2004年5月、一挙10カ国を加え、25カ国体制による新欧州が発足。欧州憲法制定、トルコの加盟など、大きな変化を迎えるEUのすべてを豊富な資料と図版で詳解。

援助専門家のための 倫理問題ワークブック

G.コウリー他著 村本詔司監訳 定価5,775円(税込)

カウンセラー、臨床心理士、医療、看護、福祉、教育、法曹……など、対人援助にあたるすべての人に贈る、初の体系的なテキスト。

〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6 TEL 06-6231-9010
FAX 06-6233-3111
〒162-0825 新宿区神楽坂4-3-3 煉瓦塔ビル TEL 03-3269-1051

日本人の心の原点、神道々の姿とは。
神道史大辞典
6月発売
日本古来の神道文化は、歴史の中でどのような人々に伝えられてきたのか。神話世界から現代まで、神道を理解するための四一〇〇項目を収録。仏教や儒教、天皇、国家との関わりの中で発展した神道の歴史を読み解く。四六倍判・函入・約一五〇〇頁「内容見本」送呈 二九四〇〇円
近現代日本人物史料情報辞典 7月発売
伊藤 隆・季武嘉也編 菊判・函入・四八四頁／予価八四〇〇円

吉川弘文館

価格
税込

東京都文京区本郷7-2 / 電話 03-3813-9151

ミネルヴァ書房

桃太郎の運命

鳥越信著

時代の波に激しく翻弄された民話「桃太郎」。この愛すべき主人公に託された日本人の子ども観の変遷の諸相を読みとる。 二三一〇円

たのしく 読む 日本児童文学

【戦前編】
【戦後編】

鳥越信編著 あらすじ、読み方のポイント、原文引用を各々見開き頁に収載。明治から現代までの240冊を楽しまむ二冊。各冊二九四〇円

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡塚谷町1
TEL 075-581-0296 宅配可／価格は税込

青木書店

婚差会(編)

¥1995・税込

非婚の親と婚外子

差別なき明日に向かって 相続や戸籍記載の差別、日常的な誹謗中傷、いまだ根深い婚外子とその親への差別。だが、ようやく、法務省も戸籍の差別記載廃止へと動き出した。当事者の体験談、法律相談Q&Aなど役立つ情報が満載。

須田努・趙景達・中嶋久人編

¥3150 税込

暴力の地平を超えて

歴史学からの挑戦

東京都千代田区神田神保町1-60

電話[03]3219-2341 Fax[03]3219-2585

●対談形式の社会科学の入門書 現代と、時代を読み解く地図
山之内靖対談集 伊豫谷登主・翁成田龍一編(四〇〇頁・五二〇円)
再魔術化する世界 総力戦・帝国・グローバリゼーション

第一部 再魔術化の諸相
第一章 総力戦 戦時国家システム社会へ 成田龍一・大内裕和
第二章 帝国 戦時国家システム社会へ 成田龍一・大内裕和
第三章 グローバリゼーション 戦時国家システム社会へ 成田龍一・大内裕和
第四章 再魔術化する世界 戦時国家システム社会へ 成田龍一・大内裕和

●緊急出版 脳移植法 改悪に反対 脳移植の危険性と脳障害患者の声
山口研一郎著 四六判・四〇〇頁・二五〇円(税込)
現代医学・技術により 現網される私たちの脳

脳受難の時代
脳ドックの危険性と見過ごされがちな脳障害患者・治療の実態を報告。脳移植法に改悪に対し健康願望の再考を促す。

御茶の水書房

東京・文京区本郷5-30-20 ☎03-5684-0751
http://homepage1.nifty.com/ochanomizu-shobo/

やわらかな遺伝子

M.リドレー 遺伝子は環境にシなやかに
対応する装置だった。ゲノム解説で見えてきた新しい人間観の誕生! ◆2520円

小さな塵の大きな不思議

H.ホームズ 宇宙塵、中国奥地より飛来する塵からハウスダストまで、多種多様な塵が繰り広げる驚異の世界 ◆2940円

働く人のための ストレス診療室

P.レジュロン 基礎知識から対処法まで
ストレスのすべてを平易に解説。11種類の「自己診断テスト」付き ◆2100円

上司と部下の深いみぞ パワー・ハラスメント完全理解

岡田康子編著 それでは部下はついてこない! パワハラ問題の第一人者による
分析/対処法の決定版 ◆1365円

紀伊國屋書店

出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業TEL03(5469)5918 表示価格は税込
http://www.kinokuniya.co.jp

イーグルトン、半生を語る

ゲートキーパー

テリー・イーグルトン著/滝沢正彦 滝沢みち子訳
カトリック修道院で過ごした少年時代から、逸話に富んだ学生時代までの思い出を語る。46判・税込2520円

●歴史はアートかそれとも科学か

歴史の風景

歴史家はどうのように過去を描くのか

ジョン・ルイス・ギャデイス著/浜林正夫 柴田知薫子訳
歴史とは何か、歴史研究にどんな意味があるのか、歴史的真理なるものは存在するのか。46判・税込3360円

大月書店

東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651(代表)

http://www.otsukishoten.co.jp/

..... 好評・内田樹の本

「おじさん」的思考

真のリベラリストここにあり。急変する価値観・社会情勢のもと、よき「おじさん」として 生きるための必読的参考書。■1890円

期間限定の思想

「おじさん」的思考2/ウチダ先生がその蘊蓄を傾けて熱く語る現代社会への苦言・提言集。■1890円

映画の構造分析

ハリウッド映画で学べる現代思想/名画の物語分析を通して学ぶ現代思想のエッセンス。■1680円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話03 (3255) 4501 価格は税込
<http://www.shobunsha.co.jp>

勁草書房

田川 建三

キリスト教思想への招待

歴史を遡り聖書を繙き、問題の背景がよく分かる地点へ誘う。3150円

読売新聞東京本社 生活情報部

幸せパレット

それぞれの結婚 パートナーと一緒にいたいと思いますか。1995円

土場 学ほか 編集

社会をくモデル>でみる

数理社会学への招待 あなたのなぜにこたえる最新入門書。2940円

東京都文京区水道2-1-1 * 価格税込
Tel 03-3814-6861 / Fax 03-3814-6854
<http://www.keisoshobo.co.jp>

高畠克子著 女性が人生の節目に出会う問題に、セラピストである著者が自身の経験をふまえて助言。 2310円

女性が癒やすフェミニスト・セラピー

寿という街 須藤八千代著 ドヤ(簡易宿泊所)という特殊な住空間で構成される町、横浜寿町で長年働いてきた著者が、選りゆく街の姿とそこに生きる人びとへの尽きない関心を描く。 1470円

ソーシャルワーカーの作業場

◎選りゆくドヤの街に生きる人びとへのまなざし

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03(3946)5666 税込価格

橋爪大三郎 社会学論集 言語／性／権力

人間活動の基底としての〈言語〉に焦点をあて、理論から天皇制・貨幣といった具体的問題までを分析する橋爪社会学の全体像。2625円

統合心理学 への道

「知」の眼から「観想」の眼へ

●K・ウィルバー／松永太郎訳
古今東西の偉大なる智慧の伝統を現代へと力強く押し開く、新しい思考のパラダイムの誕生。4935円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 (価格は税込)
<http://www.shunjusha.co.jp/>